

2023年6月4日 聖霊降臨節 第2主日(三位一体主日)礼拝メッセージ

「誰と出会うか」

牛田匡牧師

聖書 使徒言行録 2章 22-36節

今年は例年よりも早い梅雨入りとなり、先日も各地で大雨が降り、土砂崩れが起きたり、新幹線や電車が運休したりして、大変な6月の初めとなりました。その一方では、国会ではずっと審議されていた「出入国管理及び難民認定法及び日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法の一部を改正する法律案」、いわゆる「入管法」の改悪が、いよいよ参議院の法務委員会で強行採決されようとしています。「難民」という言葉を聞くと、どこか他所の国の出来事と感じてしまう位に、日本は難民が少ない国です。2021年の国際比較のデータでは、難民を受け入れて認定した数として、ドイツが約4万人、カナダが3万3,000人、フランス3万2,000人、アメリカ2万人、イギリス1万3,000人、そして日本はわずか74人、認定率は0.7%です。まさに「桁が違う」という表現がピッタリの現状です。

様々な理由で在留資格を失った外国人を国籍国まで送還するまで間、準備のために一時的に施設に収容するという現在の体制も、「身体の拘束」や「自由の剥奪」に当たるということで、以前より国連の「拷問禁止委員会」や「人権理事会」から、改善するように指摘されてきましたが、日本は無視し続けて来ています。そのような状況の中、2021年にはスリランカ出身のウイシュマ・サンダマリさんが名古屋入管で、収容中にお亡くなりになりましたが、他にも各地の入管の収容施設で亡くなっている方々もおられるとのこと。在留資格が切れた人たちを、すぐに犯罪者と決めつけて、国外に追い出そうというのは、あまりにも短絡的です。2021年から続いている今回の改悪案も、難民申請は原則2回までで、3回以上申請している人は、申請期間中でも強制送還が可能となります。ですから、たとえ紛争などで命の危険を感じて、止むなく難民として来日したのにも拘わらず、命の危険があって帰ることが出来ない場所に、強制的に送還され得るということです。基本的人権や生存権を無視したこのような改悪が、様々な屁理屈や言い訳をこねながら、強行採決されようとしているのは何故でしょうか。私はこれらの背景にあるのは、明確な外国人差別と、その裏返しとしての内輪意識だろうと思っています。

新型コロナウイルス感染症の感染症分類が引き下げられて、外国人観光客も再び、日本各地に大勢やってくるようになりました。またコンビニエンスストアでもスーパーマーケットでも、工場でも福祉施設でも、様々な所で働いている外国人労働者の姿も、すっかり珍しいものではなくなりました。しかし、いつまで経っても日

本社会の中に根深く残っているのは、あくまでも彼らは「よそ者」であって、自分たちの「内輪・仲間ではない」という意識なのではないかと思います。そしてそれは未だに続いている「部落差別」や「在日韓国朝鮮人差別」、「性差別」など諸々の差別と根を同じくしているのではないかと思っています。なぜ差別は無くならないのか。なぜ過去を知らない子どもたちの世代にまで、差別が引き継がれて、再生産されていくのか。それには様々な理由があるのですが、その一つは「出会っていない」からではないでしょうか。自分がその当事者の方に出会っていないから、自分事として感じられないし考えられない。自分が何か困っているわけではないから、「これが常識、一般論だ」と言われると、そうかと思いついてしまっ、それ以上のことを考えることもしない……。そんなことが、私たちの身の回りにも、たくさんあるのではないかと思っています。

「あの人と出会ってみて、初めて分かった。このことについて考えるようになった」。私自身を振り返ってみてもそうですし、そのような様々な出会いを通して、今の自分が形作られて来たとも言えます。言い換えれば、これまで誰と出会って来たかで、今の自分があり、これから誰と出会っていくかで、これからの自分があるのだとも言えるでしょうか。自分の計画を越えて、まるで意図しなかった形で与えられることの多い様々な出会いや経験。それらのことを思う時、それらは全て単なる偶然というのではなく、その背後に何か大きなものが働いている、ということを感じることも出来るのではないかと思っています。

さて、今回の聖書のお話も、「ペトロとイエス様との出会いのお話」として読むことが出来るのではないかと思います。先週、聖霊がペトロら弟子たちに降った「ペンテコステ（聖霊降臨）」の日の話を読みました。今回はその続きですが、聖書協会共同訳では「ペトロの説教」という小見出しが付けられています。「五旬祭」というお祭りの日になったので、弟子たちが一つの家の中に集まっていた（使徒 2:1）とありますが、お祭りでお祝いのためにウキウキして集まっていたかということ、むしろ周りの人たちの目を気にしながら、ビクビクと怖がっていたのではないかと想像します（ヨハネ 20:19）。なぜなら「お前たちも、あの十字架で処刑されたナザレのイエスの仲間だろう」と言って、イスラエルの権力者たちに扇動されたユダヤ人たちから、迫害されないか、差別されたり、イジメられたりしないか、と心配していたのではないか。だからこそ、ひっそりと仲間たちだけで閉じこもって、引きこもって、集まっていたのではないかと想像します。

しかし、そのような中で弟子たちは聖霊に満たされました（使徒 2:2）。聖書を読んでも「聖霊」とは何なのかはよく分かりません。風のようなとか、炎のようなとか、鳩のようなとか、助け主、弁護者、励ます者とか、様々な表現がなされています。明

確に「これだ」とは言えないけれども、私たちを力づけ、励まし、支え助けてくれる確かなもの、私たちに働いてくれている何か。それを「聖霊」と呼ぶのかもしれませんが。そしてその聖霊の力を受けて、弟子たちは「様々な国の言葉で話し出した」と記されているように、彼らは力強く語り出しました。よその人たちの目に触れないように、見つからないように、隠れて怯えながら過ごしていた所から、一転してむしろ自分から外の人たちに向かって語りかけ始めたわけです。

そして、2章14節からが、ペトロの語った言葉です。今日は22節以降を読みましたが、「あの十字架で処刑されたナザレのイエスこそ、救い主、キリストである」（2:36）ということ、公言している言葉でした。22節では「イスラエルの人たち」と道行く人々に対して呼びかけ、29節では「きょうだいたち」32節では「私たち」と仲間内に呼びかけ、そして36節では「あなたがた」といって再び外にいる不特定多数のユダヤ人たちに呼びかけています。とりわけ36節の「あなたがたが十字架につけたこのイエスを」という表現は、「イエス様を十字架つけたのは、あなたたちだ」といってエルサレムにいるユダヤ人たちに対して、責任を追及している言葉のように聞こえますが、37節では聞いていた人々は「俺たちのせいにするのか」と言って怒り出すどころか、むしろ「人々はこれを聞いて大いに心を打たれたとありますから、ペトロの話は、聞いていた外の人々に深く共感されたものだったのでしょう。

ペトロは話の中で「ヘブライ語聖書」の中から、ダビデの歌と考えられていた「詩編」（16編）の言葉を引用して、死から復活させられたイエス様がキリストであることを説明していますが、これら一連の言葉は、道行く人々に語りかけた体裁をとりながら、実はペトロが自分自身に向けて語った言葉としても読めるのではないかと思います。22節「ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、この方を通してあなたがたの間で行われた奇跡と不思議な業とするしとによって、そのことをあなたがたに示されました。あなたがた自身をご承知のとおりです」。ペトロ自身は、イエス様と出会い、イエス様に「私について来なさい」と声をかけられ、最も身近にイエス様の言動、言葉と振る舞い、不思議な業とするしを見て来ました。そして23節24節にあるように、イエス様が「引き渡され、十字架に磔にされ、殺されましたが、神によって復活させられた」ことを経験しました。そして32節「神がイエスを復活させられた。私たちは皆、そのことの証人です」へと続きます。

「復活」とは何か。死では終わらない、「死の苦し^{よみ}みから解放される」こと（2:24）、「彼は陰府に捨て置かれず／その肉体は朽ち果てなかった」（31）ということ、今も生きて共にいて、働きかけ続け、助け支え続けていてくれるということ。ペトロ自身が、紛れもなくそれを、ペンテコステのこの日に、この隠れて閉じこもっていた部屋の中で、実感したのでしょう。だからこそ「彼らは共に立ち上がり、声を張り

上げて」(2:14) 語ることが出来た。借り物の言葉ではなく、紛れもない自分自身の言葉として、力強く語ることが出来た。それによって、それを聞く人々が心を打たれたということだったのだろうと思います。

ペトロは「あなたがたが十字架につけたイエス」と言いながら、彼は自分自身のことも振り返っていたに違いありません。彼はイエス様が反対者たちに捕まえられる前に、「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは決して申しません」(マタイ 26:35 並行)と言いつつも、実際には自分が問い詰められ、身の危険を感じると、呪いの言葉さえ口にしながら「そんな人は知らない」と3度もイエス様のことを知らないと言いました。また、イエス様が十字架に架けられた時には、他の弟子たちと一緒に逃げていて不在でした。ですからペトロ自身も「私もイエス様を十字架につけた一人だ」と思っていたでしょう。けれども神はそんなイエス様を死から引き起こし、復活させられました。イエス様は殺され、死んで、いなくなってしまったのではない。今も確かに生きておられて、私と共にいてくださっている……。イエス様と出会った事で、ペトロはガリラヤ湖で魚を獲っていた漁師の生活を辞めて、イエス様に従いました。そして後に、復活のイエス様との出会いを通して、イエス様が救い主キリストであることを確信し、各地に福音を告げ知らせる、初代教会の宣教者となっていきました。あの時、あの場所で、もしもイエス様と出会っていなかったら……。

ペトロや他の弟子たちだけに限らず、私たち一人一人がそうです。うまくいったことだけでなく、うまくいかなかったことや、困難も失敗も含めて、様々な出会いがあってこそ今がある。またこれからの新しい出会いを通して、これまでの思い出したくないような過去の出来事とも、新しく出会っていくこともきっとあるのだろうと思います。

「誰と出会うか……」。様々な出会いによって、私たちは生かされ、導かれ、そして磨かれていきます。まだ私たちの出会っていない方々が大勢おられます。今も生きておられる復活のイエス様は、今どこにおられ、誰と共におられるのか。これからの日々も、多くの出会いに恵まれて行きたいと願います。最後に2001年9月11日の世界同時多発テロの際、ニューヨークで殉職されたマイカル・ジャッジ神父の短いお祈りを紹介します。

主よ、あなたが行かせたいところに連れて行ってください。

あなたが会わせたい人に会わせてください。

あなたが語りたいことを示してください。

私があなただの道をさえぎることがありませんように。

(中村吉基訳『マイカルの祈り』)